ゲームも楽じゃない

卓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲームも楽じゃない

【Ｎコード】

Ｎ２０９４Ｔ

【作者名】

卓

【あらすじ】

ゲームに類似した異世界トリップ物です。　Ｒ１５

序章（前書き）

まえがき

作者もとい、駄文製作者の卓です。皆さんの素敵な文を読んで、書いてみたくなりました（汗）

初心者で国語力もない私ですが、それでもバッチコーイな方、お付き合い願えれば幸いです。

序章

序章（ ∀-）

皆さんは、ＶＲゲームと言えば、どんな想像をしますか？
幻想動物や風景、剣や魔法のあふれる世界で冒険をする。または、仮想空間で大リーガーの選手になり往年の名選手と対戦。サムライになり幕末を生きる。何でもありがＶＲゲームでわないだろうか。舞台は、ＶＲゲームが開発されて十数年後の日本。人々は、ただのＶＲでは満足せず、よりリアリティと興奮を求め、そしてそれに応えるゲームが誕生しところから始まる。そのゲームは【エッグワールド】。中世ヨーロッパ的世界に、剣と魔法はテンプレだが、そこにはアナログ的要素（個人の資質と努力）が反映される。戦士ならば、リアルで剣道なり木刀をもって修練しなければ強くなれず、魔法使いならば現実での集中力と魔術書（机上での努力）でルーン（神聖語）を習得しなければ使えない。なりたい自分になれる、それがＶＲの醍醐味だか、なれるもにしかなれない事は、ゲーム内での職業・役割の住み分けを進め、【エッグワールド】ないでの生活に、リアリティとアイデンティティを創造し、今や若者の熱狂を一心に集めている。
はてさて、説明が長くなってしまったがこの話は【エッグワールド】を舞台とした、平凡少年とその仲間の話である

序章（後書き）

異世界トリップはまだ先です

農民万歳（前書き）

序章から二年後。コウタ１６歳。ゲーム内の話です（´∀｀）

農民万歳

黒眼黒髪の平凡少年、藤森コウタ１４歳。身長１６５ｃｍ　５８キロは、こざっぱりした自室でヘッドギアタイプの端末をはずし、嘆息していた。

「ちぇ～、せっかく買って貰ったのに。」ゴロンとベッドから起き上がり、悪態をつく。どうやら念願のＶＲゲーム【エッグワールド】の初印象は最悪のようだ。ただの平凡少年には、剣を振り回して敵を倒す事も、英語のようなルーンを使い方こなす事も、向かなかったらしい。

「でも、キレイだったな～」太陽を浴びて光る湖、地球では見られそうにない満点の星空。どれも幻想的でコウタの心を掴んではなさなかった。コウタには、運動神経も語学の才能も無かったが、コウタにも数少ない長所はある。例えば嫌な事があっても、いつまでも苦にしないことところ。つまり気分転換が上手く、前向きな性格である。そんなコウタだった為か、二階の自室から一階のリビングに着いた頃には、だいぶ落ち着いていた。ソファーに座りながら、【エッグワールド】の取説を読む。「ふむふむ、なるほど」「ゲームの楽しみ方は、戦闘だけじゃないんだな」コウタはしきりと関心する。仮想現実である【エッグワールド】には、冒険職と呼ばれる、戦士・魔法使い・弓師・司祭などと呼ばれる直接戦闘に関わる職と、生産職と呼ばれる、栽培師・調理師・薬師・鍛冶師・細工師など、冒険を補助する職がある。前者はキャラクターレベルや、各種ステータス値による規制があるが、後者はサブスキル的な物なので冒険職に比べ規制は少ない。コウタはこの事実に目を瞬かせた。

「よし、せっかく買って貰ったんだ。何か一つくらいできる物を探そう！」

コウタは意気込み、明日から就活生のごとく、職業を放浪するのだった。

◇◇

ーそれから二年後ー

無事高校進学をはたしたコウタは、【エッグワールド】内にある自分の畑を耕していた。結局二年前向に色々と職を試したが、栽培師（農業）が一番性にあったようである。これには、コウタの祖母は園芸店を営なんでおり、小さい頃からよく手伝いをしていて、親しみがあったのと、それと未知の世界の植物はとても、幻想的であり、ユーモラスであり、栽培は、とても楽しかったようだ。畑には赤いナスのような物・黒いトマト・そしてジャガイモ。他には薬用になる草花など見受けられる。コウタは汗を拭きながら精をだす。

「ごめんくだ～い。」どうやら畑に併設する店舗にお客様が来たようだ。

「は～い、今いきます」コウタは鍬を下ろし、質素な小屋に向かった。小屋に着くと、如何にも初心者と言えるカッコの二人組がいた。一人の男は、布鎧に銅の剣。もう一人は女、ひのきの棒に布の服。

（戦士と魔術師のペアだろうか。）

「いらっしゃいませ～。何をお求めになりますか？」

「すみません、薬草と毒消し草を5コづつ下さい。」

「はい、全部で２００Ｇです（ ∀｀ ）」お金を受け取り、注文された物を紙袋に入れて魔術師に渡す。（ちなみに1Ｇは、１０円である）

「うは～、噂には聞いていたけど、安いですね（＾＿＾）。ありがとうございます。助かりました。ここで買えなければ、街にたどり着く前にスライムにやられてたわ（＾＿＾；）」コウタの畑は、初心者が出発する村から次の街へと続く、街道沿いの中間にある。この街道は初心者最初の難関で、初期村～次の街までは道具やらしい建物もない。敵は雑魚なんだが急に戦場に来た宜しく、やっぱり苦戦するのだ。

「いえいえ（ ∀｀ ）。ここは初心者サポーターの店だから。遠慮

はいらんよ」どこか満足げにコウタが答える。それから三人はゲームの感想や、これから出る敵などの話をした。一通り話終えた頃、二人ペコリとお辞儀をしてさっていった。
ちなみに初心者サポーターとは、初心者を善意でサポートしてくれるキャラクターである。コウタはかれこれ一年半、毎日ログインしては畑を耕し、雑貨を販売しているため、攻略サイトに載るほどであり、。またその功績が運営に認められ、栽培師向けチートアイテム（霧のジョーロ、神の鍬、千種の袋）保持者と言う事で有名であった。

農民万歳（後書き）

コウタのステータス
冒険ｌｅｖｅｌ：１０（村人程度）
生産ｌｅｖｅｌ：栽培師１００（Ｍａｘ）
装備：布の服・神の鍬
持ちもの：霧のジョーロ・千種の袋

霧のジョーロ
植物の成長促進させる水がでる

神の鍬
どんな荒れた土地も、畑にできる鍬

千種の袋
様々な作物の種が入った、〇次元ポ〇ット

βテスト（前書き）

【エッグワールド】のアップグレードにあたり、βテストが行われる事に。

見事、テスターに当選したコウタ。

さてコウタの行方はいかに・・・・

βテスト

ｓｉｄｅ　テストサーバー

【エッグワールド】内中心地：エイリーン：。中世ヨーロッパ的な王道な街である。街の広場には今、百名ほどのプレイヤーが集まっていた。コウタもその中の１人である。

「は～い注目！」

スラリとした女性ＧＭ（ゲームマスター）が集まった人びとに声をかける。美人な魔術師キャラのようだ。

「本日は、当社のβテストにご参加いただき、ありがとうございます。ＧＭのミミルです。それではテスト内容をご説明いたします。」

テスト内容は以下の通り。

?:今度のアップグレードから痛覚が実装される為、どの程度の感覚をプレイヤーが感じるか？

?:自立型ＮＰＣ（感情のあるＮＰＣ）

と対話して、どの程度の対話ができるか？

?:ブレスレット型端末の性能調査。既存のステータスバー（ＨＰやＭＰ）と比べての使い勝手はどうか？

「この以上三点が今回のテスト内容です。であ、各自ランダムで決められたらＰＴで行動をお願いします。解散～（＾＿＾）」

集まっていた人々は、それぞれのＰＴの集合場所に散っていった。

コウタも自分の集合場所である、広場の犬を連れた男の像までやってきた。像の周りを見ると、すでに他のＰＴメンバーは到着しているようだった。１人は、赤髪のウルフカットをした戦士の男。１人は、銀の長髪を後ろで縛った魔術師。１人は、薄桃の髪を肩まで伸ばした、神官の女の子がいた。

「こんにちは、はじめまして。非戦闘員で栽培師のコウタです（「∀ｩ）」

コウタをかわきりに自己紹介を始める。

「まず、俺から。戦士のアキラだ。サブは調理師だ。ヨロシク！！」

（なるほどアキラは戦士らしく、引き締まった肉体的に１９０ｃｍ近い長身だ。）

「じゃあ次は拙者でござるな。メインは魔術師でサブは細工師をしておる、マコトでござる。宜しくお願いもうす。」（紺のローブに身を包んでいるので体格はわからないが、細マッチョっぽい１８０ｃｍかな。うーんクールだなあ）

「次は、わ、わたしですね。メインは神官でサブは薬師のモエで、です。よろしくお願いします。」

（う～んカワイイなぁ。１５５ｃｍくらいかな。白いローブにメイス。ちょっとミスマッチだけど（^＿^；））

各々紹介をすませて今後の予定を決める。概ね予定は次のように決まった。

まず街で各自装備を揃える。（ここでＮＰＣの反応をみる）

←

次に、合流して簡単なクエストがてら戦闘をする。（痛覚や戦闘エフェクト、ブレスレット型端末などの確認）

そんなわけでコウタも農民ではあるが、戦闘に備えて武器店に着ていた。

店にはいると、坊主のヒゲオヤジが出迎えた。

「いらっしゃい。何かいるか？って、ガキか・・チッ」

「あのうすみません。自分でも使える武器ありませんか？」

「やめとけ、やめとけ。オメーなんか外でたらすぐ死んじまうから。冒険者かぶれはやめとけ」取り付く島もなく、シッシッと追い払われる。

「あ、あのう～。こう見えても冒険者ですが（＾＿＾；）」慌てて冒険者の証を取り出す。

「ふむ、確かに冒険者だな。」少しまだ納得行かないようだ。（うは、感情豊かすぐる。）

「え～と確かに、戦闘は苦手で（＾＿＾；）」戦闘センス皆無のコウタである。

武器屋のオヤジはガサガサと倉庫奥を探すと、カウンターに戻ってきた。

「ほらよっと。オメーに使えるのは、こんなもんだ」

カウンターの上には、質素な木とか革でできた‥スリング‥だった。まあ簡単に言うと、パチンコである。厳密には違うけど。

「オモチャですか？（^＿^；）」子供の頃にみて馴染みのある物に、度惑いを隠せない。

「うんにゃ、ボウズ。ちょっと付いて来い」と言ってオヤジが店の裏庭に向かう。どうやら実演して見せるようだ。オヤジが鈴カステラほどの弾を装填すると、３０メートル先のカカシに向かって振りかぶる。

ビューン、ゴキ。とスリングから放たれた弾は、勢いよくカカシにあたるとカカシの骨を折り、首をぶっ飛ばした。

「スゴい。結構威力あるんですね（。∩。）」コウタは驚いた。

「まあな（ ∀｀）少しスピード補正の刻印はあるからスピードはでるぞ。ただ基礎体力によるダメージバランスがあるぞ」

「つまり、オヤジさんが使えば、骨を折る位の威力だが、僕が使ったらそんなに強くない？とか（^＿^；）」

「おう、その通りだ。オメーじゃ運が良くても、敵を気絶させられるくらいだがな。（ ∀｀）まあ売れ残りだから、５０００Ｇでいいよ」

「う～ん。剣だめだったし、まあ無いよりはいいか（^＿^；）うし、買った！」

「まいどあり♪まあ、弾は鉄～小石位まで使えるから。サービスで鉄の弾１００発つけてやるよ。」

「ありがとう～（^＿^）」

こうしてコウタは‥スリング‥を手に入れ、店をあとにしたのだった。

βテスト（後書き）

コウタの武器は：スリング：に決まりました。
次章は戦闘に入ります。

ピクニックに行こう

コウタ達一行は、エイリーン外門に集合し、‥ 迷いの森‼ に向けて出発した。痛覚などの体感テストの為である。

門→迷いの森道中の会話

「みんなＮＰＣとの会話どうだった？」コウタがみんなに感想を聞く。

「そうでござるな～、拙者は道具屋にいったでござるが、店番の子供に変な言葉と言われ、ショックでござった。」マコトがションボリしながら答え

「わ、わたしは、神殿に行く途中転んだんだけど。衛兵さんに大丈夫ですか？って声かけられた・・」とモエは赤面し

「俺は、鍛治へ修理にいったけど。丁寧に武器使ってるなって誉められた」アキラは得意気に答えた。

みな思い思いに出かけていったけど、今までの決まり文句しか言わないＮＰＣに比べて、人間臭く戸惑ったようだ。どんなシステムかはわからないが、概ね感情があると言うのは本当らしい。今後馴染みの店でも出来たら、店員さんにオマケでもしてもらえるだろうか。

◆◆

さて‥ 迷いの森‼ 到着。ここは初級者レベルの狩場で、スライムやチビウルフなどの雑魚が殆どだ。

まずは痛覚の確認と言う事で、‥スライムに体当たりされよう作戦‥が決行されることになった。みんなでスライムを追いかけて誘導し、スライムにわざと攻撃させて、痛みをしろう！ってな事である。

ちなみ、スライムの的になる順番は、アキラ→マコト→モエ→コウタで決まった。あらかたスライムに体当たりされ、最後のコウタの番である。

「よし、そっちいったぞ。コウタ」

アキラが叫ぶ。

「おっけ～（＾―＾）いってもこい！」コウタが、ゴールキーパーのごとく身構える。

ゴキ、ベチャ、ドスーン

コウタの顔にスライムがクリーンヒット！！

「うわ～、いってぇ～。。なんだよこれ、サッカーボールみたいじゃないか」少し涙目のコウタ；；

「おかしいなあ～、俺は痛くもなかったけどなあ♪マコトとモエは？」アキラが訝しげに他に尋ねる。

「拙者も痛くもなかったでござる♪」

「私も痛くなかったかなよ・・・・」

マコトもモエもなんでも無いようだ。

「ちぇ～、やっぱり冒険者レベルの違いか・・俺レベルひくいからなぁ～」

コウタは少し悲しげだ。

「拙者が思うに、コウタ殿がこの程度で痛いなら、拙者やアキラ殿、モエ殿も同格モンスターとやり遭えば痛いに違いないでござるな」

「「ウンウン（＝。―。）（＝。―。）」」マコトの提案に、アキラとモエも頷き。　コレにより、格下モンスターでも慎重にとコウタ達は認識を新たにする。

ちなみ、ブレスレット型端末については、ＰＴを組むと感覚としステータスがわかるようだ。前みたいに頭の上にステータスバーがあるわけでわないが、感覚で分かるので便利なようだった。

◆数日後◆

コウタ達は、試練の洞窟に来ていた。βテスト参加特典クエスト、¨神の聖別¨の為である。

洞窟奥の泉を飲む事がクリアー条件なのだ。何でもこの泉は、世界の創世神が誕生した聖地とされ、職業をカンストした者が泉を飲むと、マスタースキルを修得できるとのとだ。

コウタ達一行は、言わずもがなカンストチートキャラ達である。

アキラは戦士を。

マコトは魔術師を。

モエは神官を。
コウタは栽培師を。
極めている。みんな内心はどんなスキルを修得できるか、ワクワクしていた。洞窟の内部は聖地のせいか、敵はみあたらずスイスイと進んで行く。ただ、途中にチェックポイントがあり、真実の口のような彫刻に手を入れ、冒険者達は向けられた質問に答える。

◇お前は誰だ？

◆大好きなものはなんだ？

◇嫌いものはなんだ？

◆力を得たらどうする？

等々、スリーサイズなど多岐にわたり質問されて、泉までやってきた。コウタ達一行は、体力は減らなかったが精神的に疲れたようだ。

一行は質問と言う名の試練！？を超えて泉に到着した。
そこは洞窟の天井が崩れ落ち、空から太陽が降り注ぐ。泉は、大きさでいうと子供のビニールプールくらいだろうか。水底は蒼く光り、なにやら神秘的である。泉の側には女神像が建ち、台座には碑文が書かれていた。ルーンのようだ。これはマコトかモエに詠んで貰わないと解らない。
「私が詠みますわ、」
一行のなか、モエがおもむろに碑文に近寄った。モエは詠み始める
「我らは試練を潜りし者なり、　創世の女神は言った。‥ 神を観る者は、神になり。悪魔を観る者は悪魔になる‥ と。」モエが詠み終わると、泉の輝きがまし、清浄な波動が辺り一面に満ちた　。

「すげー、この泉の水飲めばいいのか！？」アキラが驚嘆が半分。じれったさ半分に言った。

「「「ウンウン（＝ 。— 。）（＝。 — 。）」」」

他の三人もワクワクして早く飲みたいようだ。

みんなで一斉に飲む。コウタ達の体は淡く輝きだす。どうやら体の奥底から力が湧いてくる。

ピロリロリーン♪

スキル修得の音楽が流れ、どうやら無事修得出来たようだ。

みな一応に微笑み、健闘を称えあうと、エイリーンに向けて帰還するのであった。

コウタ達のスキルについてはまた後ほど、紹介しよう。

ピクニックに行こう（後書き）

次はいよいよトリップに・・・

文才なくて泣けてきます（泣）

後夜祭　（前）（前書き）

気まぐれに更新してます。駄文です><

後夜祭　（前）

βテストも最終日、街の中心にある広場では後夜祭が始まっていた。円状の石畳の広場には、その外側を囲むように露店がたちならんでいた。
串やきに、果物。アクセサリーなどなど縁日で見かけそうなものはほとんど並んでいて、賑やかだ。
そんな中コウタ達一向は、広場に仮設でできた居酒屋で打ち上げをしていた。

「「「「乾杯！！」」」」

それぞれ手には、松葉で作ったとされるエールがもたれている。（エールといっても、アルコールを松葉サイダーで割ったカクテル。）

「ぷは～　やっぱりエッグワールドの醍醐味は、このエールだな。飲んでもほろ酔いになるだけだし、頭も痛くならないしなあ・・」

「アキラ殿、ちょっと飲みすぎでござるぞ。」
マコトが、串焼きをほおばりながらアキラをたしなめる。

「いいじゃんか、どうせ広場中央でボスの模擬戦やるんだけだろう？」

「まあ、そうでござるが・・　飲みすぎると敏捷などのステータスが下がるでござるよ。」

「まあ、モエに解呪（デバフ解除）してもらえば、いいじゃん。な

あ、モエ＾ｗ＾」

「は、はい。ある程度なら解呪できます。」

「ほら、いいじゃんか。もっと飲むぞ～♪」
アキラがウェイターにエールを追加注文する。

「呆れたものでござるなあ、まあアキラらしいか・・。少しは、コウタ殿を見習うでござるな。節度があるから、顔も赤くなってないでござるよ。」
マコトがコウタを指して、話す。

「うん？？　僕も結構のんでるよ！！　これで、１０杯めかなあ・ｗ・」

「「「エエエエ　～　」」」
コウタを除いた三人が驚ろいている。

「じゃじゃん。実はねえ、酔い止めの薬草飲んどいたんだあ。」
コウタは懐から、正○丸ほどの種をとりだした。

「これは、どくけし草の一種で水月草っていうんだ。これの実を飲むとステータス異常に耐性ができるんだよ＾ｗ＾」

「「「なんだよコウタ。俺（達）にもクレ！！」」」

「イイヨ（笑）一回に3粒ね。」

「「「おーけー」」」

アキラ達はうけとると、水月草の実をエールで流し込んだ。

「ふむ、なんか体の中から清々しさがあふれてくるでござる。」

「そうだな、なんか体がすっきりするな。」

「ううん、気分いいです。」

「そうだろう＾＾　なんせ効果の高いレアな植物だからな。僕の植物コレクションの自慢の一つだよ。」

「そうでござったか。コウタどのはさすが栽培師でござるな。」

「どういたしまして＾＾、そういえば話はもどるけど、ボスの模擬戦ってこのＰＴでるんだよね？」

「そうだな、このＰＴだぜ。」

ＰＴのリーダであるアキラがおもむろに相槌をうつ。

「じゃあ、どんな敵で作戦は？」

「それは参謀のマコトにまかせるぜ。」

「まったくおぬしは、リダらしくないでござるな。まあ、ちゃんと作戦は考えてあるでござるが。」

それからマコトが作戦をはなす。

「「「ふむ、なるほど。わかった（です）！！！」」」

「じゃあ、各自準備をして定刻にこの店の前集合でござる。」

「「「「おっけ〜」」」」

こうして、前夜祭のひと時は過ぎていくのであった。

後夜祭　（後）（前書き）

駄文です、そろそろ設定の解説章をもうけねば。。。

後夜祭　（後）

後夜祭も終盤にさしかかり、メインイベントであるボスの模擬戦がはじまった。

石畳の広場の中央には、ストーンサークルをもしたフィールドが設置され、くじ引きで決められた順番で試合が進められていく。

コウタ達もそのサークルの周りに陣取り、観戦をする。

「なあ、マコト。ボスは3種類の中からランダムで出るんだよな？」アキラが、おもむろに質問した。

「そうでござるよ。ボスは3種類、巨大クモ・巨大ゴーレム・巨大スライムの中からランダムでござるな。」

「ちなみに、一番厄介なのは、どれ？」

「それは、巨大スライムでござる。物理攻撃が効きづらいのと、フィールド変換能力があるでござる。」

「フィールド変換て、たとえば火山地帯とかになったりするやつか？」

「そうでござる。火山や毒の沼、氷原や砂漠で、どれも持続ダメージが付くでござるよ。ちなみに、変換するフィールドはスライムの色によってちがうでござる。」

「結構、えげつないな。ちなみに、スライムの変換能力って発動率

はどのくらい？」

「ふむ、ほぼ１００％でござる。初撃が大体そうでござるな。」

「ｗｗｗｗ」

「まあ、モエ殿の神聖魔法と、さきほどのコウタ殿の水月草があれば大丈夫でござる。」

「そうか、ならまあ心配いらないな。そろそろ、俺たちの出番だ。出撃！！！」

「「お、おお！！」」

モエとコウタが胸の前でガッツポーズをしらがら返事をする。

前のＰＴが終わり、いよいよコウタ達は中央のストーンサークルにやってきた。

ＧＭのアナウンスがながれる。

「ただいまより、アキラ選手率いるチームの模擬戦をはじめます。召喚！！」

ＧＭの掛け声とともに、コウタ達の前に青白く光る魔法陣があらわれる。

ボフン・・

一瞬の閃光と音とともに、巨大スライムが現れた！！

「うげ、まじかよ。さっきフラグ立てすぎだろコレ・・・」

「仕方ないでござるよ、出てきたんだから・・　ちなみに、色は赤。これは火山地帯コースでござるな。」

巨大スライムがプルプルと震え、跳ね上がる。着地とともに分裂し、チビスライムが現れフィールドが変換されていく。

「モエ、神聖魔法”聖域”を発動。あとは、コウタからもらった水月草の実を各自飲むこと。」
アキラが檄をとばす。

「「「了解！！」」」

「聖なる護り、われらが安楽の地。神よ、この地に護りの光を！」
モエの神聖魔法が発動され、半透明のドームがコウタ達を包み込む。

「ふう、なんとかなったぜ。」

「安心は、まだ早いでござる。アキラは今回は戦力にならないから、タンカーになって巨大スライムの攻撃を受けてＰＴを守るでござる。コウタは、チビスライムをけん制。その間に拙者が、水属性の魔法で仕留めるでござる。」

「了解したぜ。マコト頼んだぞ。」

こうして、アキラがスライムの体当たりを受け止め、その間にマコトが魔法を打つ作戦で進んでいった。

「くう、スライムのコアまで魔法が届かないでござるな＞＜　」

「マコト、こっちもしんどいぜ。なんとか早く仕留めてくれ。」
スライムに体当たりされつづけて、さすがのアキラもボロモロだ。

「せめて、一瞬でもスライムのコアまで隙間ができればいいでござるが・・・」

「一瞬でも、隙間ができればいいの？」
いままで神の鍬（ただし通常モードなのでただの棒）でチビスライムを追い払っていたコウタが答える。

「ほんの少しの隙間で、いいでござる。」

「おっけ～。なんとかしてみるよ。」
そうコウタが答えると、神の鍬を思いっきり地面に振りかざす。

ポワンっと言う音と共に巨大ライムの側の地面が畑になる。すかさずコウタが、千草の袋に手を突っ込み種を取り出す。

「それじゃいきますか！栽培師奥義、”開花”」

コウタの握る種が一瞬煌めく。それをスリングにセットし、巨大スライムに向かって種をなげる。

シュポっと音がし、スライムの側の畑に突き刺さる。

しーん

しーん

「コウタ殿、なにも起きないでござるな・・・」

「まあ、見ててよ。」

１０秒くらいだろうか、突如地面から芽が吹き始める。
２０秒くらいからは、それはツルとなりスライムの向かって飛び出し
２５秒たったときには、茨が巨大スライムを串刺しにしていた。

「いまだ、マコト。」
コウタの呼び声とともに、マコトの魔法が発動する。

「凍てつけ凍てつけ、氷の刃。往け”アイシクルランス”」
長さ１ｍ、直径２０ｃｍほどある、氷の槍が茨を伝わってスライム
のコアに突き刺さる。

ピキピキピキ

巨大スライムのコアに到達と同時に、スライムを芯から凍らせてい
く。
それを合図に、アキラが叩く。

パリン・・

巨大スライムが粉々に砕けちった。

「ふう、やったでござるな。ナイス、コウタ殿。」

「ふう、うまくいった＾ｗ＾；」

コウタは、自慢げに相槌をうち。

「やっとこだぜ、もうボロボロ・・」

アキラは、力尽きて膝をかがめ。

「はうう、疲れた＞＜」

モエは、ヘナヘナと座り込んだ。

「勝者アキラ率いるチーム！！」

ＧＭの戦闘終了の掛け声が響きわたりコウタ達のボス模擬戦は終了したのである。

後夜祭　（後）（後書き）

次回は、設定解説章の予定です。

人物設定集（前書き）

やっとこ人物設定です。行き当たりばったりで書いてるので、矛盾やまだ作り込めていないところがあります。追加要素ができ次第、追加します。

人物設定集

人物設定

【藤森コウタ】　（コウタ）

容姿：　黒目黒髪の平凡な少年　身長１６５ｃｍ　５８？　１６歳

ゲーム内設定

職業：　栽培師ｌｅｖｅｌ　１００（カンスト）

装備：　神の鍬（くわ）どんな荒地も畑にできる鍬。
　千草の袋　　さまざまな種が出てくる袋。
　霧のジョーロ　植物を早く促進させる水がでるジョーロ。
　戦闘武器は、スリング

スキル：　開花　植物を瞬時に成長させるスキル。（栽培師ｌｅｖｅｌ　１００で覚えるスキル）

性格：　おおざっぱでマイペース

【神崎アキラ】

容姿：　赤髪のウルフカット、筋肉質な3枚目。　身長１９０ｃｍ

７５？

職業：　戦士ｌｅｖｅｌ　１００　調理師ｌｅｖｅｌ　６０
（サブスキル）

装備：　槍と重装備（鎧）

性格：　戦闘バカ

【轟鬼マコト】　（とどろき）

容姿：　銀髪　知的な細マッチョ　１８０ｃｍ

職業：　魔術師ｌｅｖｅｌ　１００　細工師ｌｅｖｅｌ　８０

装備：　杖と紺色のローブ

性格：　慎重で思慮深い。どこかジジイ臭い

【楠　モエ】　（くすのき）

容姿：　桃色のツインテール　幼児体型　１５５ｃｍ

職業：　神官ｌｅｖｅｌ　１００　薬師ｌｅｖｅｌ　７０

装備：　メイスと白いローブ

性格：　大人しく、あがり症。

招待状が来た！！（前書き）

駄文です。読んでくださりありがとございます

招待状が来た！！

βテストも無事終わった今日この頃、コウタ達はアップデートサービス直前のプレミアレセプションに来ていた。

レセプションは、エッグワールド運営会社がメディアとユーザー向けにサービスのカウントダウンイベントの一環として行ったもで、レセプションの参加資格は、βテスト後夜祭でボス模擬戦に勝ったＰＴの中から、抽選で選ばれると公式には言われている。

（つまり、ＰＴ単位で招待されたのだった。ゆえに、アキラ・マコト・モエも参加している。）

運営会社の一室に設けられた会場は、ゲーム内の聖堂を模して設営され、会場の正面中央に設置され女神像が蝋燭に照らされ、幻想的な世界をかもしだしている。

会場内の人々は、ゲーム内の職業装備のコスプレを着用し、さながらゲームの一コマの様におもわれた。

そして式もだいぶ進み、立食式の食事をコウタ達も楽しんでいた時に、今回のホスト役の代表として運営会社の会長が会場に登場した時に、それは起きた。

突如、会場が閃光につつまれ運営会社の会長とコウタ達を含む５人以外存在しない真っ白な空間になったのだった。

アキラ：　「おい、これどうなってんだ？」

マコト：「演出ではないようでござる。それに私達以外に人がいなそうでござるし。」

モエ　：「そ、そうですね。どなっちゃったのかしら・・あわわわ。」

コウタ：「もぐもぐ・・・・」

４人？が戸惑っていると、会長が話しかけてきた。

会長　：「いやあ、今日はご参加していただきありがとうございます。レセプションはたのしめましたかしら？」

アキラ：「楽しむもこうもねーよ。おい、これどうなってんだ？」

会長　：「あら、楽しめなかったのかしら。残念ねえ」

マコト：「どうやら、会長さん。あなたはこの状況の原因がわかってらっしゃるようでござるな？」

会長　：「ええ、わかっていますわ。だって、私が引き起こしたのだから。」

モエ　：「ひ、引き起こしたって、、、」

会長　：「ええ、そうよ。私、エッグワールドの女神だから。」

「「「「「えええええええ」」」」」

アキラ：「ああ、女神様なんですね。って、納得できるか。！！」

会長　：　「じゃあ、証拠をみせようかしら？」

そういうと、会長は突如光り輝くとギリシャ神話出てきそうな布をまとった姿になった。

女神　：　「これでいいかしら？」

マコト：　「たしかに、目の前で変身されては・・・　一度話をしっかりと、聞かないといけないでござるな？　理由があって、このようなことをされたと思うでござるし。」

女神　：　「そうね、あなた話が早くて助かるわ。じゃあ、ちょっと理由とＶＲＭＭＯ”エッグワールド”の説明しようかしら。」

そういえと、女神はどこからともなく丸いテーブルと椅子をだすと、腰掛けコウタ達にも席を勧めた。

こうして、女神が語りはじめた・・・・・・

女神の理由とＶＲＭＭＯの真相（前書き）

駄文です。読んで下さりありがとございます

女神の理由とＶＲＭＭＯの真相

女神　：「簡単に言うと、エッグワールドに異世界から人材を呼んで風通しを良くすることね。ぬかみそだって、かき回さないと腐るでしょ。世界だって同じなの。その為にＶＲＭＭＯを人材選別の試験として使ったのよ。」

アキラ：「つまり、俺達はその人材として選ばれたってことだよな？」

女神　：「そうよ。あなた達は、試練の洞窟での質問で人格は審査させてもらったし。」

マコト：「たかが、ゲームだろ。それが何で試験になるんだよ！」

女神　：「あなた、鈍いわね。そっちの魔術師さんは少しは分ったみたいなのに。」

マコト：「そうでござるな。それはＶＲＭＭＯとしてのエッグワールドのシステムが関係しているでござるな。」

女神　：「ええそうよ。私の作ったこのエッグワールド（ＶＲＭＭＯ）は、個人の資質が反映されるゲームだわ。つまり、現実で剣を振るうことが上手な者が戦士をやったり、現実で知性が高いものが魔術師をやったりしている。現実でできる事しか、ゲームの中で出来ないわ。」

マコト：「だけど、逆もあるのでござるな？」

女神　：　「そうよ。ゲームの中で修練したことが、現実に影響していくの。運動神経や、知力などあがってるはずよ。」

アキラ：　「そんなはずねえ、たしかに少しは剣道でもつよくなったきがするが、ゲームの中の様にはいかねえぜ。」

女神　：　「そうね、それは事実だけど。月の重力を例にすればわかりやすいかしら。月の重力は地球のの６分の１。月では、ジャンプすれば高く飛べるわよね。地球とエッグワールド（異世界）の関係も似たとこかしら。」

マコト：　「つまり、地球ではそんなに変化が見らえれなくても、エッグワールド（異世界）では、かなり強いって事でござるな。」

女神　：　「その通りよ。あなたたちは、エッグワールド（異世界）にいけば、ゲームの中とほぼ同じ力が出せるわ。」

モエ　：　「あ、あの。異世界に行くってことは、こっちの世界から消えるって事ですか？」

女神　：　「そうよ、存在そのものが消えるわ。家族や友人などの記憶から無くなる。いなかった事になるわ。」

アキラ：　「勝手いってるんじゃねーよ。」

女神　：　「そうね勝手だわ。でもあなた達にとってもいいこともあるのよ。」

コウタ：　「いいことって、なに？　モグモグ」

女神　：「実は、異世界への人材の条件がもう一つあるの。それは、あと半年以内に何等かの原因で死ぬ人間てことよ。」

モエ　：「・・・　死ぬんですか？」

女神　：「確実に死ぬわ。私には命の灯が見えるもの。だから、エッグワールド（異世界）で第二の人生はどうかしらって、言ってるのよ。」

アキラ：「女神さんよ、ちなみに拒否権はあるのか？」

女神　：「もちろんあるわよ。ただし、ここでの記憶は消して、死ぬ運命を待つだけ・・」

コウタ達：「「「「少し考えさせてください・・」」」」

女神　：「いいわよ、時間はたっぷりあるんだから。」

それから3時間後・・・

女神　：「どうやら結論がでたみたいね。みんなエッグワールド（異世界）に行くってことでいいのかしら？」

アキラ：「おう、まだ死にたくねえ」

マコト：「そうでござるな。まあ、家族から記憶がなくって、悲しまないならいいでござる。」

モエ　：「は、はい。」

コウタ：「いいんでない？」

女神　；「じゃあ、これからエッグワールド（異世界）に送るけど、各人には違う国々に行ってもらうわ。長く生きていれば、会えるはずよ。それじゃあ、いってらっしゃい。」

女神が話終わると同時に、コウタ達を閃光が包み込んだ・・・・

第1章　コウタの開拓日記　編（前書き）

ここからの話は、コウタの一人称作品になります。今後ほかのメンバーの話も混ぜていきたいと思います。

駄文です。。

第1章　コウタの開拓日記　編

異世界1日目

はい、藤森コウタです。レセプションから女神に召喚されてたどり着いたのは、岩の国アズールでした。ここで簡単にエッグワールドの地理をお話しします。

エッグワールドは1つの大陸とそれを取り巻く諸島からなっています。そしてこの大陸は四国を大きくしたような形をしており、自分のいるアズールは大陸中央にあります。

見渡す限り岩と高い渓谷、そして礫砂漠（岩のサバク）になっています。一部に他国から流れ入る河があり、そこに人々がくらしています。エジプトの様ですね。そしてなぜか、僕の召喚された場所はその一角の大きな岩の頂上、エアーズロックのような所でした。広さ的には東京ドーム何個か入りそうな勢いです。そして高さは１００ｍ。側面は絶壁になっており、僕では降りれません・・

さて、状況説明という現実逃避から戻るとしましょう。

「うーん、困った。第二の人生ｔｈｅ　ｅｎｄかなあ・・・」

女神様もなぜこんなとこに、僕を飛ばしのでしょうか？まあ、仕方ないですね。

とりあえず、衣・食・住を確保しなければ・・・

とりあえず衣はどうしよう・・　うん保留だ。しばらくは今のままでいいや。

食は・・・　うんとりあえずは、畑を作ればいい。

じゃあ住、家はどうしよう・・・　こんな岩の天辺でなんにもないや・・・

とりあえず、ゲームの中のスキルが使えるならと思い自身のスキルを調べます。

いろいろ見た結果、使えそうなのがありました。”品種改良”じつはこれ、試練の洞窟で手に入れたカンストスキルです。なんでも、遺伝子組み換えの様にある程度いじれるらしい。さて、どんなものを創ろうかなあ・・

蛍草のような花弁を家にしようか・・・　うーん、岩の上は風が強いので飛ばされそうです・・
茎の長い物はだめだなあ・・

しばらく考えるとピラメキました!!　地面にしっかりと根を張る植物、イバラを利用することにしました。　まず、品種改良で、棘をなくし葉を丈夫で広く大きい物を作ります。それを、直径４ｍほどの円になるように、スキル”開花”を使いながら、円周に植えていきます。そして、霧のジョーロ（以後ジョーロ）で水をやってと。

しばらくするとムクムクと育ってあら不思議、半球状の高さ３ｍ、直径４ｍのドームができました。あとは、ドームの中の土を神の鍬（以後クワ）で掘れば、竪穴式住居の完成です。パチパチパチ

次は、畑ですが同じように球状のドームを作りました。ただしこちらは、イバラの質を水晶にして温室的な物に作り替えました。さっそく、ドラゴンフルーツの様な植物の苗を植えてそだてました。今日のごはんは、このドラゴンフルーツになりそうです。

さて、家と畑はなんとかなりました。しかし問題、そう一番の問題がありました。そう水がないのです！！こまった・・・　今日のところは、ジョーロの水を飲みます。ただし、僕の冒険者ｌｅｖｅｌは１０なので、基礎ＭＰがないのです。今日これだけの事をやってしまったので、ジョーロから出てきた水は、コップ一杯しかなかったです。ぐすん　とりあえず今日は、ごはんを食べて寝ます。おやすみなさい

水がなくては・・・（前書き）

今回は、短く理屈っぽい回となりました。　また、文章中に出てくる知識は、作者のウル覚えなので、事実と異なることがあります。ご了承ください。

水がなくては・・・

異世界２日目

おはこんにちばんわ、コウタです。今日も水の確保為に奮闘しています。さて、一晩寝たら昔テレビで見たことを思い出しました。地球のどこかには樹齢が５００年を超えるイチジクがあって、それは断崖絶壁に生えているそうです。絶壁に生えている植物はそれなりに見かけるのですが、そのイチジクなんと、水を求めて根っこが地下の水たまりにむかって３００ｍも張っているそうです。岩の隙間を縫い、人の腕よりも根が太くなっているとか。思わずこれだと思いました。植物には、本能的に水に到達する性質があるのですね。これを利用できないかと今、エッグワールドの植物図鑑を調べています。

ペラペラ・・　ペラペラ・・・

図鑑とにらめっこする事半日、ついに使えそうなのがありました。その名も”ビーノ”。ツル状の植物で、イメージ的には巨大な豆の木だそうです。ツルということで、とりあえず、鍬(クワ)で耕して開花を使って埋めます。ジョーロで水をドバドバっと・・・

しばらくすると、芽が出てきました。葉がある程度出たらツルの先端を切ります。そうするとツルの先にわき芽ができて、伸びて行くツルが増えるのです。（キュウリとかもこの方法で行うと沢山とれます・・）　さてこのビーノですが、今のところ太さが３ｃｍ程度高さが１ｍ位です。あとは、地下の水源につくまでは、このまま変化ありません。

ところで、水の確保はどうするつもりかとお思いになる方もいるかと思いますが、とりあえず山で遭難したときの方法でやってみたいと考えています。今回は竹を使った方法でご説明します。

まず、竹をしならせてアーチ状にして固定し、竹の先端を鋭角に切ります。あとは先端に水を受ける容器を置いておけば、竹が地中の水分を吸い上げるのでそれをいただく寸法です。

異世界５日目

ビーノが直径が６ｃｍ、高さが１．５ｍ位になりました。いくつかツルを残して、ほかは切りとります。
さて、うまくいくでしょうか。・・・

しばらくすると、５００円玉くらいの雫がポタポタしてきました。成功です＞＜　これを貯めておけば、とりあえずは、飲み水は大丈夫そうです。ふう、助かった・・

ドラゴンフルーツから緑の庭園に　（改）（前書き）

時間の経過が早いです＾＾；とりあえず、この回で開拓日記編終了です

スナナツメに関する記述を一部修正しました。　黄色い実→赤い実

ドラゴンフルーツから緑の庭園に　（改）

異世界６日目

はい、コウタです。先日まで飲み水の問題にかまけてて食べ物まで手が回らず、毎日ドラゴンフルーツでした。正直つらいです・・・ということで、新しい作物を育てたいと思います。しかしながら、ジョーロの水は自分のＭＰでは一日３？しか出せないので、農場を造ろうとおもうと正直、肥料が足りません。　なので、ジョーロに頼らない為に、土づくりから始めることにしました。　さて、今回のキーワードは緑化植物です。

緑化植物とは、砂漠などの緑化推進の為に植えられる植物で、今回は”スナナツメ”を植える事にしました。この、スナナツメは、乾燥や暑さ、そして夜の寒さに強い落葉樹です。

そう、ポイントは落葉樹なのです！！　腐葉土が作れるところが今回のポイントです。

そして比較的に成長が早く土壌の細菌とも相性が良く、土壌改良の働きがある植物です。枝葉は家畜の飼料となったり、もちろん果実も栄養価が高いのが売りです。あとは、果実を酒の原料にしたり、ミツバチがいれば、花の開花時期はハチミツが採れます。

ということで、今回はさらに、品種改良したスナナツメを植えることにしました。まずはいつも通り、耕して開花を使って植えます。将来的には、ドーム状の温室での栽培からこの台地（岩の上）を緑の楽園にしたいのが目下の夢です。夢は大きく・・・　しかし、現実は毎日ドラゴンフルーツです・・・　トホホ

異世界７日目

毎日泥と汗にまみれています。今日は灌漑(かんがい)の為に、用水路を造ろうと計画しています。ビーノも少しづつ大きくなり、出る水量も増えてきました。将来的には、かなりの水量になるので、今のうちに作り始めます。

まず、この広い台地の上に大まかに線を描きます。そして、あとは用水路となるところの岩を次々と土に変えて耕していきます。それにしても、結構骨がおれます・・・　ふう、

異世界９日目

前に植えた、スナナツメが紅くなり収穫になりました。もぎ取って食べます。モグモグ・・・　甘くておいしい。ビーノからの水量が多くでるようになったら、穀物なども育てたいです。

異世界３７日目

用水路を作り始めてから、３０日。台地の端まで耕しおわりました。正直風が強くて怖いです。。落ちそうだ・・・

異世界４０日目

さて今日は、耕しおわった用水路とビーノからあふれる水を受け止めていた池とをつなぐ作業をしています。こうすることによって、水で耕した土を押し流してもらう予定です。運ぶのつかれるし・・・予定通り台地の下に濁った濁流となって流れていきます。　ふう、楽ちん楽ちん＾ｗ＾

ちなみに、この作業を段階的に行い、ため池の為の深さなどを確保します。

異世界５０日目

はい、コウタです。今日は強風対策をしようと思っています。何分ここは高いので、風当りが強いです。具体的には、台地の端から１０ｍずつ離れて、耕しています。ニレやポプラを植え防風林にするつもりです。ふう、それにしても広い・・・

異世界３６５日目

急に１年が経ちました。栽培師のコウタです。今日は高さ２０ｍ直径１ｍになったビーノによじ登って台地を見渡しています。われながら１年で出来るとは思わなかったですが、台地の上に緑の楽園ができました。湖に、森林。そして果樹園に穀倉地帯。ビーノからも毎分何トンという水が溢れ、いくつもの滝となって台地の下に流れ落ちています。　さながら、ドラ〇もんの雲の〇国って感じです。

ドラゴンフルーツから緑の庭園に　（改）（後書き）

次回から、アズール国成り上がり編で、文章帯がまた変わります。
お読みくださり、ありがとうございます

第2章　アズール国成り上がり編　（異世界人との出会い）（前書き）

日記形式から、また違う文体となっています。読みづらく申し訳ありません。

第2章　アズール国成り上がり編　（異世界人との出会い）

はい、コウタです。みなさん如何お過ごしでしょうか？私は只今洗濯中です。洗濯する服はあるのかって？実は、ブレスレット型アイテムバックに雑穀袋（あさぶくろ）が入ってるのに気が付いて、首と手を出すところだけ切り取って簡易ロープとしてきています。原始人だってこれよりいい物きてそうです・・

さて、ゴシゴシと洗っていると空の彼方から、何かがこちらに近づいているのに気づきました。
ゴシゴシ・・・　洗濯は大変ですね。

ロープを干していると先ほどの何かがさらに近くに見えます。　およそ台地から５００ｍ先でしょうか。アーモンド形の気球が見えてきました。

「むむ、あれは飛行船かなあ？」

さらに近くによってきます。いよいよはっきりと飛行船が見えてきました。飛行船といっても、気球の部分は布で出来ており、そこに小船が釣り下がっているような作りです。船尾には、プロペラがみえます。
うーん。これは、未知との遭遇か・・　いや異世界人との遭遇か・・・
とりあえず、一張羅の布の服に着替えます。さすがに、雑穀袋をかぶっただけでは嫌ですね。

さらに飛行船が近づいてくると、ロープの先についたイカリをおろし着陸しました。飛行船から、２人の男が降りてきました。一人は

ローマ兵の様な確固をしたいかにも兵隊さん。もう一人は、ローブを着た魔術師っぽいひとです。なんかドキドキします。近くまで来たので、こちらから挨拶をしました。挨拶は人の基本ですからね。

「こんにちは、お客さん。」

挨拶をしましたが、返事がきません。もしかして、言葉が通じてないんでしょうか・・・　もう一度、声をかけてみました。

「僕の言葉わかりますか？」

再度呼びかけると、兵隊さんのほうが返事をしてきました。

「失礼、ここの水と緑の豊かさに呆けておりました。私はアズール国軍。辺境警備隊隊長、イクサス。隣にいるのは、従軍魔術師のアビシャ。今日はこの台地の調査に来ました。」

「僕は、この庭園の主。コウタです。」

「変わったお名前ですな。」

「ええ、よく言われます。して、どのような調査ですか？」
ここは、相手に合わせて出方をみるとしますか・・・

「率直に申し上げると、数か月前に他国からアズールに来る商隊（キャラバン）から滝の流れる台地があるとの報告がありました。最初は蜃気楼じゃないかと我々も思っていましたが、度重なる報告があったため、軍で調査をすることになりました。」

「なるほど、わかりました。それで、現実にこの水と緑を見てどの

ように思われますか？」

「信じられないですね、我々は隔年ごとに国の隅々まで回って異常がないか調べていますが、ここはやはり滝などなかった。」

「それはそうですよ、ここは岩の台地でしたから。私が開拓したんですけどね。」

コウタが言った途端に、イクサスとアビシャは目を丸くした。

「それは真ですかな？してどうやって・・・」

イクサスとアビシャは、コウタに詰め寄る。

「そ、そうですね・・　私は、栽培師をしておりまして。口で説明しても難しいので実際にやって見せましょう」

やっぱり、口で説明するのって大変だよね。でもどの程度手の内を見せていいものか。正直、善人か悪人かも判らないしなあ。　そう考えると、チートな道具（鍬やジョーロ）は見せない方がいいな。とりあえずは、当たり障りの無い辺りで行こう。そう考えがまとまると、ポケットからスナナツメ改の種を取り出し、開花をかけて近場の岩の上に撒く。これは、、岩の上でも根を張る様に、スナナツメを品種改良したものである。

しばらくすると、種からムクムクと芽がでて、岩に根が張り背丈３０ｃｍほどに育った。

「おおお、信じられませんな。しかし、現実に芽吹いている・・・」イクサスとアビシャが感嘆の溜息をもらす。

あんまり、驚くのでひょっとしたらとんでもないチート能力なのかと思い、ちょっとした安全の為の嘘をつくことにした。

「ええ、これは私の師匠の物でして。特殊なスナナツメの種だと聞いております。虫でいうと、マツムシと似た性質でして。条件が整うと発芽します。」

存在しない、架空の師匠をでっち上げて自身の能力を隠すことにした。

（ちなみに、マツムシとは、水に触れると休眠から目覚める虫で、おおよそ１２０年は生きていられるといいわれています。）

「ほうう、それはまた凄い。して、その師匠のお名前は？」

アビシャが聞いてくる。

「名前は、マサコ・フジモリといいます。」

後々ボロがでるといけないので、園芸店を営んでいる祖母の名前を言うことにする。

「お聞きしない名前ですな。」

「ええ、学者肌の方でして。生涯を研究に費やしておられました。特に、研究成果も発表することもなく、亡くなりましたが・・」

（ちなみに、コウタの祖母は生きています・・・）

「それは、申し訳ない事をきいた。すまない。」

「いえいえ、お気遣いなく。せっかくですからお近づきのしるしに、お茶でもいかがですか？」

とりあえず、第一印象はよくしないとね。それに、ゲームの時のアズール国の知識と現実のアズールの摺合せも行いたいし。

「「はい！！」」

「それでは、どうぞこちらへ」

こうして、コウタは湖の側にある木陰のテラスへと二人を案内していくのであった。

湖のほとりで（前書き）

普段のコウタの性格は、おおざっぱでマイペースですが、自身の危機？に瀕して隠れた一面が表にでてきます。　ドラ〇もんで言う、映画で活躍するの〇太ってとこでしょうか・・・・

湖のほとりで

はい、コウタです。最近自分の名前の前に腹〇いと形容詞が付きそうな気がする今日この頃です。
さて、今は樹の切り株を利用したテーブルを囲んで、イクサスさん達とお茶会という、腹の探り合い第2ラウンドに突入するところです。

◆湖のほとり・テーブルを囲んで話すコウタ達3人◆

まずは、タロウが席をすすめ話しかける。

「ささ、お茶でもと申しましたが生憎と茶器を持ち合わせておりません。ですので、水分の多い果物をご用意させていただきました。どうぞ召し上がってください。」

そういって、テーブルの上にハンザルを置きます。ハンザルとは、見た目がメロンの様な砂漠にあるスイカの原種の一つで、本来はとても苦くてラクダが通っても見向きもしない物です。しかし、このハンザルは僕が改良してあるので甘くなっています。

「やや、これはハンザルではありませんか？ご冗談もほどほどに・・・」

「・・・・・・」

アビシャは、声を荒げて眉を顰め、イクサスは黙ってしまい和やかなムードはぶち壊しです。

「ええ、ハンザルですよ。しかしながら、私が研究を重ねて品種改良をしたものです。甘いですよ。」

そう言うと、ハンザルを手にとり、まず自分が食してみせます。

ムシャムシャムシャムシャ・・・（コウタのハンザルを齧る音が響く）

それをイクサス達は信じられない様子で眺めている。ハンザルを完食すると改めて勧めてみた。

「河で冷やしておいたのでおいしいですよ。ささ、冷めないうちにどうぞ。」

しばらくすると、黙ったままだったイクサスがハンザルを手に取り齧った。

「！！！！！！」

一瞬、ワサビの入ったシュークリームを食べたような顔をするとムシャムシャとかぶりつき始めた。それをみて、アビシャもハンザルに手にとって、食べ始める。

「！！！！！！」

こっちも、同じような顔をして驚いたようだが　ムシャムシャと食べ始め、一人につき小玉スイカほどのハンザルを３つ用意してあったのだが、食べきってしまった。

「美味しかったですか＾＾？」

「ああ」

「美味しいですなあ。ホント驚きました。」

イクサスがうなずき、アビシャが感想を述べた

「いえいえ、お口に合ってよかったです。」

フフフフ、これで先制パンチは成功だ。これから先、話のイニシアチブは握れるだろう・・・

「それにしても、コウタ殿は凄腕の栽培師なのですね。お若いのに大したものですな。私達魔術師もあらかた知識の徒と自負しておりましたが、驚きです。」

「いえいえ、とんでもない。まだまだ若輩者ですので。過分な評価です。」

一応、謙遜を美徳とする日本人気質なため、謙遜しておく。

そこへ、アビシャとの会話にいままで寡黙だったイクサスが話しかけてくる。

「いや、大したものだ。これだけでも大陸中に名がしれる程のものだ。それだけの実力のあるあなたが、この国にいらしたのは、どのような用件かな。できればこの国に来た経緯をお聞かせ願いたい。」

こころなしか、イクサスの眼光が鋭く感じる。

「少し長くなりますが、宜しいでしょうか？」

「ああ、お話ください。」

「わかりました、でしたら私と師匠の生活からお話しを始めましょう」

うん、やっぱり思った通りだ。こちらが実力をしめせば、あとは国の脅威になるかならないか。利用できるか出来ないかを見極めるところだろう。ここまでは、想定内だ。うまく話を運んでいくためにもう少しだけ、作り話を話さないと。じゃあ、いっちょはなしますか。。

こうして、コウタは存在しない師匠との生活からこの台地に飛ばされる経緯をはなした。

◆コウタとイクサスのやり取り◆

「なるほど、コウタ殿は幼少のころに師匠の元へ引き取られたとのことですね。」

「ええ、師匠と両親が知り合いでして。両親の亡きあとに師匠が里親になって育ててくれました。」

「それで秘境に、師匠と暮らしていたと。」

「はい、物覚えする頃には師匠と暮らし、栽培師の修業をしておりました。ですが、師匠は私を拾ったときには、もう７０歳を過ぎた高齢でした。」

「それで、その師匠が他界したあと師匠の意志を継ぐ為にアズールに向かったと」

「はい、その通りです。師匠はサバクの緑化を研究のテーマにしておりました。私もそれを引き継ぎたいと。」

「なるほど、お若いのに苦労してる。それに次いで、転移魔法具の故障でこの台地とは・・」

「はい、師匠が死ぬ間際にこの秘境から出るには、転移の魔法具を使いなさいと言われてまして。師匠の弔いと遺品の整理などを終えて、魔法具を使いました。その結果がこの台地ですが・・・・」

「いろいろと大変でしたなあ。いやあ、つらい事をお聞きして申し訳ない、これも職務がらで。」

「いえいえ、お勤めですから。それにしても、今度はこちらからお聞きしたいのですが。」

「なんなりと」

「実は秘境から出たことがなかったので、この大陸の国々については全然しりませんで。できたら、アズールだけでもお教え願えないでしょうか？」

「ええ、よろこんでお話ししよう。幸い、アビシャは歴史にも造詣が深いのでアビシャからお聞きください。」

「はい、ありがとうございます。」

こうして、コウタとイクサス達の思惑が渦巻くお茶会は続く。

（コウタの性格がどんどん、腹黒くなっていくような・・・・）

アズールという国（前書き）

前半は、アビシャの語りです。

イクサス：　精悍な逞しい体つきの２０代後半の男性。

アビシャ：　白髪で小太りの５０前半の好好爺。

アズールという国

前半は、アビシャの語りです。

「でわ、簡単ですが。アズールについてお話しましょうぞ」

まずはじめに、この（四国を大きくしたような）大陸には、主要４か国と１つの地域。そしてその国々の属国がいくつかあります。

大陸中央にわれ等がアズール、そしてそれを囲むように

右上から魔法の国”ハーネス”

右下に騎士の国”ランスロット”

左上に神殿の国”メッシア”

左下には、魔獣の住処”ゴルドーラ”　（かつての魔王の領地）

地域別には、ランスロットは国王が納める国。メッシアは教皇が納める国。残り２つは共和国。そしてゴルドーラは、一部の亜人以外しか住まない魔境となっています。

その中で、ここアズールは移民の国と呼ばれており、建国の歴史はおよそ５００年ほど昔、大陸全土を巻き込む戦争があった折に、魔王を倒した英雄達の一人が流民を引き連れてこの地に流れ着きました。その時の流民が築いた国です。われ等の先祖は、自由な国を目指して憲法を制定し、この国を共和国としました。

アズールの国土はおよそ２２００万平方キロ（ほぼ東京都）、その内５０％が礫砂漠の荒れ地、４０％が砂の砂漠、そして残り１０％が河川の周辺に広がる人が住む土地です。

大陸の中では一番国土が狭く、土地は痩せております。近年、国土の南部で魔導機関（エンジン）に使用される魔晶石が発見され、人口と経済が賑わいつつあります。

そして、我が国の特徴として、国民は自身の開拓した地を所有することができます。ただし、その土地に見合った納税を行っていただくことになります。おそらくですが、コウタ殿の開拓した土地もコウタ殿の所有と認められるかとおもわれます。ただ、今までに前例のない規模ですが・・・

※（アズールに流れる河は解り易く言うと、ピースマークの真ん中３本を右に倒した感じ。それぞれの河はアズールを取り巻く各国から流れはいっていまします。アズールの首都は、その３本の交差したデルタ地帯にあります。）

ｓｉｄｅ　コウタ

アビシャさんの話を聞きながら、自分のエッグワールドの世界と照合していく。ほぼ同じようだ。それと、アズールの特徴も。議会のある共和国と、開拓地の所有。そう、一番の問題は所有権。これだけやっといて、国に没収されたら泣けるかならなあ・・・　まあ、そのためにハンザルをお茶会で出したんだけどね。自分の実力が国の為になるって、議会のお偉いさん方も感じるだろう。まあ、上手くいけばいいが・・・

2時間というアビシャの語り終了・・・

「アビシャさん、どうもいろいろと教えて頂いてありがとございました。」

そう、コウタがぺこりとお辞儀をする。

「いえいえ、少しでもお役にたったなら。嬉しい限りですのう。」

アビシャが、時分の知識を披露できて満足そうに笑う。

「さて、そろそろアビシャ。我々は軍に戻り、報告しなければ。」

そういうと、イクサスが席を立つ。

「そうじゃのう。えらい長居してしもうた。台地の下では部下たちが首を長くしてまっておるだろうに」

「こちらこそ、長い時間お引止めしてすみません。これは、台地の下で待っている部下の皆さんに・・」

そういって、ハンザルの小山を指さします。（これは一部議会に流れる事を予測してやっています。）

「おお、かたじけない。部下も喜ぶだろう。アビシャよ、飛行船をこちらにまわしてくれ」

「了解じゃ。」

それから、飛行船が湖に到着。コウタもハンザルを飛行船に載せるのを手伝うと、最後にイクサス達が船に搭乗しました。

「それでは、失礼する。また後程、伺うだろう。それでは、出発！！」

「まったく、年寄をこき使って。少年また今度会おうぞ！」

そういと、アビシャさんが船のプロペラに手をかざします。すると
ゴゴゴゴゴゴ　と　音共にプロペラが回転し、船は遠ざかっていきました。

「ふう、これでひと段落？かなあ」

今日はつかれたので、早めにねることにしましょう。

こうして、異世界人との遭遇初日は過ぎていくのでした。

アズールという国（後書き）

１０／８　にアズールを流れる河についての記述を追加しました。

初めてのおつかい　（前書き）

イクサスと別れてから2か月後の話となっています。

読んでくださってありがとうございます。初心者の文ですので、生暖かく見守ってやってください。

初めてのおつかい

イクサス達と出会ってから。２か月後

はいコウタです。みなさんお元気ですか？最近では、名前に詐〇師の形容詞も付きそうな勢いです。
さて、イクサス達と別れてからアズール議会より正式に土地の所有と入国が、条件付きで許されました。なんでも台地の下に水を垂れ流していた結果、台地を中心に緑地が広がりつつあるそうです。その緑地を国に譲渡してほしいとのことです。まあ、いまでも東京ドームが軽く何個も入る土地をもっているので、これ以上はいらないから条件を飲みました。ちなみに、所有地に付く税金ですが、スナナツメの苗を年間決まった本数納める事と、畑などの視察の要請があった場合同行してもらいたいそうです。かなりこき使われそうな予感がします・・・

あと飛行船での連絡は不便との事で、この台地にワープポータルの設置とその警備の為の兵士を常駐させたいとのことでした。ワープポータルとは、よくゲームで見かける街と街を瞬間で移動できる装置です。もちろん大賛成です。これによって、街に楽ちんにいけるんですから。もう一つの常駐兵ですが、いろいろな思惑がありそうです。当面は監視の意味もあるみたい・・・

さっそくですがワープポータルを使って街に行こうとおもいます。ワープポータルは石でできたアーチ状の扉のない門で、石柱にはルーンが刻まれています。利用には銀製の魔力のこめられた手形が必要で、僕のもらった手形は　庭園⇔首都　だけの物です。まあ、一

日の使用回数が決まっているので、国の認可制で使用者が限られています。とりあえずは街に行って栽培した薬草を売って服を買う予定です。

◆アズールの首都にて◆

ワープポータルをくぐると、そこは大きな通りの一角でした。歩く人々の服装は、古代ローマを思わせる感じです。そして碁盤の目の様に張り巡らされた通りには、店が立ち並び、店の入り口には日よけの天蓋が張り巡らされています。食料品に装飾品、生活雑貨。あとは武器や防具など特にカテゴリーはなく、ゴチャゴチャとしている感じでしょうか。　まずは、薬草を売りに薬屋に向かいます。大通りをしばらく進むと試験管のマークのかかった看板が見えてきました。お目当ての薬屋です。

店の入り口をくぐると、一段と低くなっています。ここいらの建物は、部屋の中を地下へと堀って作られていて、なんでも昼真は涼しく、夜は暖かいとのことです。さて、部屋に入ってすぐ、カウンターに恰幅のいいおばさんが座っているのをみつけて、声をかけました。

「こんにちは」

「いらっしゃい」

「あの、これを買っていただきたいんですが。」

そういうと、薬草の束を出します。

「ほう、毒消し草じゃないか。結構量があるねえ。どこでとったんだい？」

「これは自分で栽培したものですよ。これでも栽培師なので」

「おや、栽培師なのかい。若いのにえらいもんだねえ。ちょいと薬効を調べるからそこでまちな」

そういうと、カウンターの後ろの棚から、フラスコと試薬を出してきました。

「それじゃあ、調べるとしよう。」

そう言うと、フラスコの中に葉っぱと試薬をいれ、かき混ぜています。次第にフラスコの中の液体は青くなっていきました。

「これは中々の品だねえ。大したもんだ、２０００Ｇでどうだい？」

（前にも述べましたが、１Ｇ＝１０円くらいです）

「ええ、結構ですよ。お願いします。」

「えらい素直だねえ。ここいらじゃ、商談の掛け値は交渉するのが挨拶みたいなもんなのにさ」

「いえ、この国にはまだ来たばかりでして。相場もしりませんので、それとこれからもご贔屓にして頂こうと思いまして。」

「なるほど、じゃあ２５００Ｇにしてやるよ。ちょっとまってな」
そういうと、おかみさんは小袋に代金を入れて渡してくれます。
「ありがとございます。コウタと言います。またご贔屓に」
「また持ってきな。あと、私の名前はマチルダだ。」
「ありがとうございます、マチルダさん。それはそうと、手頃な服屋を知りませんか？これしかまともな服がなくて・・」
そう言うと、かなりボロくなった布を服を指さします。
「そうかい、じゃあ私の知り合いの店紹介してやるから、いってみな。私の紹介と言えば少しは安くなるさ」
そういうと、店の名前と簡単な地図を描いたメモを渡してくれた。
「重ねて、ありがとございます。」
「ああ、気を付けていきな。」
こうして、タロウは薬屋から服屋へとむかっていったのだった。

初めてのおつかい　（2）（前書き）

コウタの衣装が変わります。

人物描写って難しいですね＞＜

初めてのおつかい　（2）

◆マチルダさんおすすめの服屋にて◆

あれから15分歩き、通りの奥まった工房が犇(ひし)めく一角に服屋は見つかりました。賑やかな通りのお店とは違い、下町の服屋って感じです。中を覗くと、反物から出来あいの服。また古着が、所せましと並んでいました。若い女性の定員さんに話しかけます。

「こんにちは、マチルダさんの紹介できました。」

「いらっしゃい。今日はなにをお求めですか？」

「今日は、普段着を買いにきました。今着ているような、服ってありますか？」

今着ているのは、レセプションの時に来ていた布の服でイメージ的には、ド〇クエっぽい感じのものです。

「えーと布の服ですね。そのデザインは、外のデザインですね。」

「外ですか？」

「ああそういえば、外っていっても解らないですね。ここアズールは大陸のへその様なところで、周りはサバク。ここの民はアズールの周辺の国々を外って言うんですよ」

「なるほど、ちなみにアズールだとどんな服装が一般的ですか？」

「麻や綿で作った筒状のチェニックに、腰でベルトや紐で縛ったものですね。あとは外出時のオシャレで、トーガという一枚布をそのその上からまとっったりします。なにせ、ここは暑いので、風俗とかは少し外とは違うんですよ。」

（トーガとは、古代ローマの装束のひらひらした布のことです）

そうお姉さんが言うと、何着か出してきてた。見た目は、古代ローマひらひらの下に来ている服みたいな感じだ。

ゲーム時代は、大陸中一律に買える装備が決まっていたからなあ・・・

・　ここらへんが、ゲームじゃなくて異世界ってことか。郷に入れれば郷に従えっていうし、それに今着てる服は熱いからなあ・・・

いろいろ考えましたが、買うことにしました。

「予算は、２０００Ｇくらいまでで。外出用に1着と作業用に2着ほしいんですが。」

服のほかに、靴とかも見たいので予算を絞ってます。

「ええ、そうです。綿の服は、７００Ｇ。麻の服は４００Ｇ位からしますね。」

「綿の服が結構高いんですね。」

「そうですね、外なら５５０Ｇってとこですが、綿は栽培が大変でして」

「そういえば、綿は水のいる作物でしたね。ここで水は、貴重ですもんね。」

「そういうことです。」

「じゃあ、綿の外出着と作業用に麻の服を2着下さい。」

「あと、下着とマントはどうされますか？マントは綿とウールがありますが。夜中は冷えますので、あるといいですよ。」

「とりあえず下着は、欲しいです。マントはどうしようか・・・靴（サンダル）とかも買いたいしなあ・・」

下着はもうゴムが伸びてるので、いい加減ほしいです・・

「マチルダさんの紹介ですから、古着のマント（綿）でよければサービスしますよ？」

「いいんですか＞＜？　ありがとございます。ぜひお願いします。」

それと、針と糸も買っておくことにしました。この世界では自分で衣服を繕うのが基本ですからね。

「全部で１９００Ｇとなります＾＾」

代金を支払って布の服3着・下着4着とマントを手に入れました。これで、雑穀袋（あさぶくろ）を着なくて済みそうです。ちなみに、下着はふんどしで、綿のさらしを巻いて使います。（ふんどしって気持ちイイですよね・・・）

その後、靴屋に行ってサンダルも買いました。お金は残り１００Ｇ。
お金がほしい・・・今日この頃です・・・

お金持ちになりたい　（改変後）（前書き）

デメリットのところで、少し変更があります。
あとコウタの妄想部分など削除となっています。

お金持ちになりたい　（改変後）

はい、コウタです。服も新調し、気分も財布も風通しがいい今日この頃です。
今の所持金は、１００Ｇ・・・　かなり貧乏です。　広大な土地を手に入れてアズールでお金持ちになろうと思っていたのに、現実は厳しいようです。　そこで、自分の土地のメリット・デメリットを挙げて考えてみようと思います。

（以下、コウタの覚え書き）

メリット

その１：　広大で水と緑の豊な土地を持っている。

その２：　作物については、ある程度の改良をして大量生産ができる。

うん、お金持ちになれるはずだ。なぜお金がないのだろうか・・・

デメリット　（今後の課題）

その１：　事業を始める為の資本がない。

その２：　沢山の作物を収穫する労働力の不足。

その３：　仮に、大量の作物を収穫できても今のところ運ぶ手段が

ない。

その４：　この台地へ陸路での交通アクセスが不便で人の行き来に難がある。（今のところ、限られた人しか使えないポータルがあるだけ）

その５：　商業権の有無。アズールでは、基本的に露店が禁止されている。

（自分の店先で路肩に店を開くことは、許されている。）

ざっとあげて、こんなところか？

その３については、ワープポータルがあるじゃないかっていわれそうだが、ポータルは人専用で貨物は運ぶには不向きのようだ。

あと問題は、その５。商業権の有無である。アズールは前述の通り移民の国で、いろんな人々が流れてくる。勘の言い方ならわかるかもしれないが、問題はいろいろな人が流れてくることである。中には、アンダーグランドの方々とかもだ。　アズールは建前上、周辺各国に配慮してアンダーグラウンド勢力排除の元、事務所の所在がその商業区域にない者へは、商売を禁止している。また、事務所の設置についても、その該当地域に持ち家がある住民であることが前提である。これは、身元のはっきりした者しか商売ができないためである。なので、借家に住んでいるものは商売を開くことができない。

つまりアズールで商売をするには、商業区内に事務所もしくは店舗を持つか、、アズールの商店に荷物を卸して品物を売るしかない。また、他人に店先を貸すことを禁止している。なかには、ショバ代

を払って使わせくれるとこもあるらしいが、そんなところは間違いなく、黒い交際だ・・・・。最近は、商工業にたいする規制緩和が叫ばれているみたいだが、商人達とのつながりの深い政治家によって阻まれている。

さて、書いてみたけど問題は色々とある・・・

資本に輸送に商業権。そして何よりは商人達の既得権だ。自分の実力なら、主要な作物・薬草などは栽培できるし、量産もできる。しかし、市場にそのようなものをだすと、相場が崩れ経済が破綻してしまうだろう。それでは、生産者や商人達が立ち行かなくなるし、そういった既得権を守る保守派の議員が排除に動きそうだ。

とりあえずは、他の作物と競合しないことから始めるか。競合しないことは、既得権を侵さない大前提だしな。

まずは、この台地で作る作物等のブランド化。それには、手始めにアズールの中を見て回らないといけないな。近いうちにイクサスさんにでも相談してみよう・・・

まだまだ、お金持ちへの道のりは長い・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2094t/

ゲームも楽じゃない

2011年10月10日11時58分発行